巻　頭　言

■鎮魂，反省　そして希望

南　　敏　和*

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分頃，三陸沖～茨城県沖の広い範囲を震源とする未曾有の大地震があり，10 日後の現時点で死者・不明者が 2 万人を越える戦後最大の震災となった。改めて多くの犠牲者の方々に哀悼の意を表し心からご冥福をお祈りするとともに，被災者の方々には心よりお見舞いを申し上げます。

今回の災害はマグニチュード 9.0 の大地震に加え，予想を上回る津波が被害を大きくした。われわれ阪神・淡路大震災を体験したものでも想像もできないほどの悲惨な状況であった。これに加え東京電力福島第一原子力発電所で深刻な事故が引き起こされた。これまで経験したことのない自然の猛威と事故の連鎖に専門家を含め多くの人たちが「想定外」であったと衝撃を受けている。

地震に対しては以前より三陸沖での大地震の可能性が警告されており，他の地域より備えはされていたと思われる。津波に対しても岩手県沖には世界最大の防波堤が築かれていて，地震による津波の発生も予測されていた。また原子力発電所は旧知のごとくこのような地震に対しても「多重防護」により，間違っても放射性物質は放出されないシステムになっていたはずである。これらすべてが機能しなかったことで「想定外」という便利な言い訳を専門家といわれる人たちが使っている。

社会インフラを構築していく場合，当然ながらその機能と投資コストをバランスさせていく必要がある。往々にして 100 年に一度の事象に対して，どの程度のコストをかけるのか議論になる。技術者もこの議論に巻き込まれ，ある意味妥協してしまうことがある。やはり社会インフラの場合，リスク管理が非常に重要であり，万一の場合のリスクの大きさにあった設計がなされ，それに対応する投資がされることが不可欠だと考える。この点も含め，技術者は技術に対する甘えと過信を猛省する必要がある。

さて，このような災害が起こった直後よく今何ができるか，何をすべきかということがいわれる。ただ災害直後ではまず被災者の救済が第一で，われわれのできることは援助のための物資や義援金の提供などにかぎられてくる。ある段階まで，被災者の救援や原発の危機対応などは専門家に任さざるを得ず，素人が出て行けば活動の阻害になるばかりである。あるスポーツ選手が語っていたが，今でなくともきっと自分たちの役立つ時がやってくる。その時のために今できる範囲で懸命にトレーニングしておくと。技術者も同じだと思う。被災者の救済が一段落付けば，そこから復興が始まる。この中心になるのは技術者であるし，その活躍無くしては再建はなし得ない。そのためにも今から準備が必要である。当然ながら被害の実態の把握，阪神大震災以降の震災対策の有効性の確認，さらに新たな震災対策の検討など技術者個々の立場で進めておくべきである。いろんな検証はされるであろうが，絶対に技術の後退を招いてはならない。

今回の震災は一部地域のことではなく，日本全体に関わる災害である。この震災からの復興はおそらく 10 年以上の長期にわたるであろうが，明治維新や戦後復興，阪神大震災など幾多の苦難を乗り越えてきた実績が日本にはある。きっと見事に復興を果たすものと信じているが，先にも書いたがその中心になるのが技術者である。技術者が信念をもって，日本再建に邁進すれば必ず復興は実現する。

「がんばろう！日本」

（2011 年 3 月記）

* *Toshikazu Minami*：神鋼鋼線工業㈱